

まんだら通信

第 186 号 (通巻 208 号)

平成 23 年 (2011) 12 月 佛誕 2577 年 皇紀 2671 年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



ブータンの『国民総幸福量』

三月十一日の東北地方を襲った大地震と、千年に一度という大津波に加えて、福島第二原子力発電所の爆発という大きな被害に見舞われるなど、歴史に残る大災害の年でした。特に放射能については、政府の発表がどこまで信用できるかわからないこともあり、相手が目に見えないだけに不安を膨らませたということがあります。未だに出口が見えない有り様です。

政府の対策のまずさが招いたことが多いのですが、重苦しい気持ちになりがちなのも多いのではないのでしょうか。そのような先月、今まで耳にしたこともないようなヒマラヤのふもとと人口七十万、面積は九州ほどのブータンの、新婚はやのワンチュク国王陛下と王妃ジェツン・ペマ王妃さまご夫妻が、国のお客様としてお出でになりました。

三月の東日本大震災の時は、いち早く百万ドル(約八千万円)の救援金を届けて下さっていますね。

先き様に失礼に当たるかと思いますが、国力から考えれば貨幣価値が日本とは比べ物にならないほど貴重な、目の飛び出るようなお金です。

仲むつまじいお二人の顔形や、日本の着物によく似た民族衣装が親近感を感じたというところもあるでしょうが、お二人のお人柄で、行く先々で会う人ごとに温かな感銘を与えてお帰りになりました。

新聞やテレビは大きく伝えませんでしたでしたが、国会での演説には日本への深い洞察と同情と激励の心があふれていて、私は大きく心を打たれました。

「三月の壊滅的な地震と津波のあと、ブータンの至るところで大勢のブータン人が寺院や僧院を訪れ、日本国民になぐさめと支えを与えようと、供養のための灯明を捧げつつ、ささやかながらも心のこもった勤めを行う様子を目にし、私は深く心を動かされました。」：「他の国であれば国家を打ち砕き、無秩序、大混乱、そして悲嘆をもたらしたであろう事態に、日本国民の皆様は最悪の状況下でさえ静かな尊厳、自信、規律、心の強さを持って対処されました。文化、伝統および価値にしっかりと根付いたこのような卓越した資質の組み合わせは、我々の現代の世界で見

出すことはほぼ不可能です。」

余りの褒め言葉に、読んでいて顔が赤くなる思いでしたが、単なる外交辞令ではないことは、その話し方からもよくわかりますし、日本が勝れた国であることは歴史を素直に読めば納得できることです。将来に互ってより多くの人に読んで戴けるよう、紫雲寺のホームページに全文がありますので、是非お読み下さい。

国王は演説の中で触れませんでした、ブータンの農業を近代化し、最高の称号ダシヨを賜られ、五十九歳で急逝して、国葬を以てブータンに眠る西岡京二さんの功績は大きいと思います。

ワンチュク国王の親近感、同じ肌の色ということの他に、仏教の「物の多さより心の豊かさが大事」、「他人への思いやりが大切」という、私たちと同じ思いがあるからではないでしょうか。

世界中が経済発展こそ幸福になる道と、思っています。昔を知っている私も、持ち物や食べ物豊かになったと思います。けれども、我慢が出来ず、自分だけ良ければという人や、心を病む人の多さも、日本始つて以来と言つてよいでしょう。

ブータンは、経済優先ではなく『国民総幸福』を大きな目標にしているそうです。仏教の『少欲知足』で、お金や品物の多さではなく、心の豊かさが大事なんです、ということですね。ブータンの世論調査では「私は幸せです」という人が八割以上だそうです。

日本が国を開いた百五十年前、世界中の有色人種の国は、日本とタイ以外は白人の召使いでした。悲惨な運命をはねのけるために、明治の人たちは血を吐く思いで、国の力をつけました。

大東亜戦争のおかげで、アジアの白人は追い出されました。アラブ諸国やアフリカも独立できました。

日本は今でも世界一の債権国だそうです。そろそろ『起きて半畳、寝て一畳』の江戸時代の哲学を学び直す良い機会だと思いますが、如何でしょうか。

◆ 12 月になりました。

あと 20 日余りで今年も終わります。読者の皆様のおかげで、何とか今年の最終号を発行できます。有難うございました。

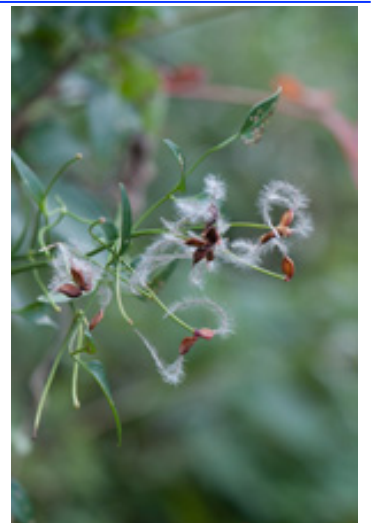
◆ 総本山智積院では、真言宗智山派の直接のご先祖、興教大師覚鑒上人のご命日の 12 月 12 日にそのご恩に酬いるため『報恩講』を行います。それはそれは荘厳な法要ですが、この 2~3 年都合がつかずお参りできませんでした。年齢も 80 近くになりましたし、来年のことはよくわかりませんから、今年こそお参りに行く予定です。

修行でもありますから、孫弟子も連れて行くつもりです。

◆ 裏面の左下の記事とつながりがあるのですが、インド独立記念行事は中央式典の他に幾つかあったそうです。ある式典ではラビ・レイ元下院議長が「日本が日露戦争に勝ったことによって、インド国民が勇気づけられ独立戦争に立ち上がった」と挨拶し、独立運動の闘士でインド法曹界の重鎮、レイキ博士はインパール作戦について「太陽が空を輝かし、月光が大地をうるおし、満点に星が輝く限り、インド国民は日本への恩義を忘れない」と訴えたそうです。

日本では「アメリカと日本が戦争したって本当なの？」という若者が多いそうですから、日露戦争

など持ち出すインド人って時代錯誤なお世辞と思うでしょうが、白人を除く世界中の人が、自分がロシアに勝ったように喜んだのは間違いありません。東京裁判で唯一とり「日本無罪」の判決文を書いたインドのラダ・ビノード・パール判事も「私は子どもだったけれど、1週間続いた日本の戦勝パレードに胸を張って毎日加わった」と言っていますし、トルコは今でも大の親日国ですね。◆ 右の写真。何だと思いませんか。9 月号で紹介のセンニンソウの種子です。このヒゲのようなふさふさを仙人のおヒゲになぞらえてこの名前になったのだそうです。12.08 龍渉



余滴

にっぽん人情小説

第七十一話 娘の誕生日

落語家 三遊亭鳳豊

先日、私はドルを持って、いやエンがあつて、石川県金沢市に行つてまいりました。

金沢、いいところですね。おもしろい言葉を教わりました。「ぎんかなまなま」と言う言葉です。ご存知ですか？

厳しく冷え込んだ冬の日の朝、道路が凍つてつるつるになった状態をさす言葉だそうです、なんだか、楽しそうな言葉ですね。「なまなま」ですよ。念のため。

その金沢で、愛知県から来たというひとりの看護師さんに出会いました。名前を富士恵美子さんとおっしゃいました。

若い頃、名古屋大学医学部附属病院に勤務し、福祉施設に勤務したのち、平成二十一年に自分で介護専門の会社をつくり、いまはご自分で、訪問看護ステーションを開設しています。

訪問介護というのは、看護師が医師と連携しながら、患者さんの家やホームで闘病している人のもとを訪れて、健康状態のチェックから看取りまで行う仕事です。

私がいま、「心温まるいい話」を探していると話すと、恵美子さんがちよつぱり悲しい顔をしながら、最近体験した訪問看護の話をしてくれました。

患者さんの名前はAさん、七十歳、男性です。

医師の紹介で、恵美子さんが訪れた時は、すでに直腸がんの末期で、しかも、肝臓まで転移していました。

Aさんはひとり住まいで、聞くところによれば、若い頃、奥さんと別れたために、近くに娘さんがひとりいるだけだということでした。恵美子さんが訪ねていくと、それはもうツッケンドンで「俺はどこも悪くないよ、看護師さんが必要ない！」と怒鳴ります。

そんなことには慣れつこの恵美子さんは、それでもニコニコしながら挨拶をする、と、横を向いて、「帰れ！ 帰れ！」と言うばかり。もうどうにも手に負えない患者さんだったそうです。

でも、こんなことで諦めないのが、訪問看護師さんたちです。恵美子さんと同じです。怒られても、怒鳴られても、Aさんのお宅に通います。夜間来られない娘さんに代わつて訪ねると、「うるさい！」「帰れ！」何を言つても、相変わらずです。でも、いつもニコニコしている恵美子さんの笑顔

が気になるのか、恵美子さんには、少しずつ、Aさんの怒鳴る声が小さくなつてきたような気がしました。

そんなある日、恵美子さんは、サプライズ（驚き、不意打ち）を考えたのです。「ねえ、Aさん、もうすぐ娘さんのお誕生日ですな？」

「何が誕生日だ、いくつだと思つてるんだ。おめでとうなんて、うれしくもない」

Aさんは怒り出してしまいました。恵美子さんは、どうしたらAさんの気持ちに寄り添えるか、毎日考え続けました。

そして、誕生日当日。恵美子さんは、誕生日カードを買つてきて、Aさんに言いました。

「毎日ご飯を作りに来ている娘さんに感謝の言葉を贈りませんか？」

ずいぶん思い切つた提案をしたのですが、恵美子さんは余裕たつぷりでした。

『お誕生日おめでとう』ではなくて、『いつもありがとう』って書きましよう」

そう促すと、Aさんはベッドから起きて、サインペンを受け取つたのです。そして、書きました。

「いつも有難う 父より 平成二十二年十一月二十五日」

日付は、娘さんの誕生日でした。

「わー、Aさん、大好き！」

恵美子さんは、思わずやせ細つたAさんの体に抱きつきました。

「娘さん、驚くよー。見ててね」

夜中に娘さんから恵美子さんへメールが届きました。

「今日はサプライズありがとう。最初で最後の父からの贈り物で、私の最高の宝物になりました」

冬になってガンが進行したAさんは食事を受け付けなくなりました。用事で来られない娘さんに代わつて、恵美子さんが食事を作つてあげました。

「私が手打ちしたうどんを、細くしてそうめんみたいにしてきました。卵とじうどんを作りますけど、食べますか？」

それから数分後、もはや一人では起きることすらできなくなつていたAさんが、なんとベッドサイドに座つて、もくもくと食べ始めました。

「おいしかった。ありがとう」

恵美子さんが聞いた初めての「ありがとう」でした。

それ以来、二人は恵美子さんの手のひらに載るiPadで地図を見ながらの温泉旅行に出るようになりました。足柄峠を越えるときは♪まさかりかついだ金太郎ー、と歌っているうちに、「ここは昔、慰安旅行で行つたことがある」とAさんは思い出話を語つてくれたそうです。

もうAさんは、恵美子さんの訪問を心待ちにするようになっていました。「寒かっただろう？」「いつもありがとう」「もう遅いから気をつけて帰れよ」かけてくる言葉まで変わっていました。

それから数日後……。

朝六時頃、恵美子さんに娘さんから電話が入りました。Aさんの呼吸が肩呼吸になつたと連絡があつたので、すぐに飛んでききましたが、医師に確認すると、あと数時間の命だということでした。娘さんが自分の子供を迎えに家に戻つた直後、Aさん

は静かに息を引き取りました。あれだけ怒つていたAさんとは思えない、穏やかな顔でした。

「Aさん、娘さんへのあの手紙、『私の宝物です』って彼女、言つてたよ。すごいねえ、Aさん、最高の人生だったねえ。世界にひとつしかない宝物をこの世に残したんだもの」恵美子さんは、そうAさんに囁きながら、静かに看取つたそうです。

今月も、MOKU出版と著者三遊亭鳳豊 師匠のご好意による転載です。

インド独立第一の功労者

ある事柄を別の角度から見ると全く違つて見える、ということはママあります。

インパール作戦は歴史に残る、日本軍の大敗北ということになっていきます。今月号のMOKUに、あの伊能忠敬の子孫、加瀬英明さんが書いています。平成十二年八月、ニューデリーで開かれたインド独立五十周年記念式典に招かれた時、日本軍と一緒にインパール作戦を戦いインドに攻め込んだ、インド国民軍の戦友会幹部に、日本への感謝状を託されたそうです。文面には「インド国民は大日本帝国陸軍の戦友たちが、インパール作戦に当たつて、インドの独立のためにともに流した血と汗と涙に、深い敬意と感謝の念を捧げる。永遠に大日本帝国陸軍の栄光を称えたい」とあるそうです。

大東亜戦争というと、日本の野望から起きた侵略戦争で、恥ずかしい限りと思つている日本人が残念ながら多いのですが、生きるか死ぬかの瀬戸際に追いやられた我が国が、巨人アメリカを相手に、止むに止まれず立ち上がったというのが本当の姿です。

もう一つ大事なものは、植民地という鎖につながれて、悲惨な暮らしをしている国々の開放でした。「インド国民軍」も、イギリス領だったビルマで義勇兵を募り、日本軍が訓練してインドに攻め込んだのです。指揮官はスパン・チャンドラ・ボースで、彼の言葉「チャロー・ディッリ」（進め、デリーへ）がインド国民を奮い立たせ、独立のきつかけになりました。

インド人の間では、実際に行動したこと、ガンジーさん、ネルさんよりも高い評価があると、先年インドに行った時、ガイドさんも自慢げに言っていました。